
双銃の異世界人

雨流 光希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双銃の異世界人

【Nコード】

N4703Z

【作者名】

雨流 光希

【あらすじ】

両親おりつきとが居ないながらも、平凡な生活を送っていた高校一年生、式織しき 月斗

彼の生活は、一通の送信者不明のメールにより大きくその人生を変えられた。

良い意味でも悪い意味でも大きく。

序章・きっかけ

スマートフォンを操作しながら帰路につく。季節は冬。まだ午後六時前なのに、辺りはすっかり暗くなっていた。

（少し図書室でゆっくりしすぎたかな。でもあの小説は面白かったな）

そんな事を考えつつ彼、式織 月斗は少しだけ歩調を早めた。制服の上にダッフルコートを着ているとはいえ、さすがに寒い。ぶるるつ。

短く震えスマートフォンが手の中でメールが来た事知らせる。

（ん？なんだこれは）

メールには送信者のアドレスがなかった。

本文だけの簡素なメール。そこにはこう書かれていた。

『このメッセージを受け取ったあなたにお願いがあります。

私達を助けて。聞き届けてくれるなら、この言葉を唱えてください。ゲートオープン』

悪戯にしても凝ってるな。最初に抱いた感想はそんなもんだった。ただアドレス無しでメールが着たことに戸惑った。もし本当に助けを求められていても、連絡の取り様がない。

本当に信じていたわけではないが、先程読んでいたファンタジー小説の影響もあるだろう。歩く足を止め、月斗は声に出してみた。

「ゲートオープン」

冷たい風が顔を撫でた。目で見た限り周りの景色に変化はない。

（やっぱり悪戯だったのか、なんと手の混んだ）

そう思い再び歩き始めようとした所で、世界は変わった。周りの景色が月斗を中心に回り出す。次第に回転の激しさを増し、狭まって行く。

「まてまて、現実的に考えてありえないだろ！なんだよ。これ？」
あまりの事に戸惑い、答えが返ってくるはずもない問いを口に出す。
その間も回る景色は狭まり続け、あと数センチで接触するという所
で月斗は意識を失った。

ファンタジー世界

「ね・・・ねーいき・・・」

身体を揺さぶられる感覚と共に頭の上から、声を掛けられているようだ。

どうやら意識を失ってしまったらしい。月斗は軽い頭痛に顔をしかめながら、目を開けた。

「ねーってば、生きてるの？」

「ああ、大丈夫だ」

まだぼんやりとしか見えないが、相手は少女のようだ。反応があった事に安心したのか、その子は近くにあった椅子に腰かける。

「よかった。せつかく呼んだのに動かないんだもん。失敗したのかと思って心配したわ。身体は動く？」

頭痛も消え、視力も戻ったようなので、月斗は立ち上がる。目の前にいた子はとてつもない美人だった。背中の中ほどまで伸びた水色のロングヘアーに、同色の快活そうな瞳。胸は控えめだが、スレンダーなスタイルは、異性、同性共に惹きつけるオーラが漂っている。見た目には同年代に見えるが、フリフリしたロリータファッションの為、年下にも見える。辺りを見回すと豪華な家具の置かれたレнга作りの部屋だった。

「身体は平気だけど、呼んだって？学校の近くに居たはずだけど？」
一瞬、目を奪われてしまったが、月斗は少女に疑問を問う。

「あら？メッセージにあったはずだけど？助けてくださいって。一応説明しておくけど、ここはヴィラルよ。貴方は私のメッセージに答えたから、ここに來たってわけ」

少女は薄く笑う。妖艶な笑みだが、服のせいで少女には似合わない。
「はっ？あれはマジだったって事か！夢なら冷める起きるんだ俺！」
少女に言われた事を急には信じられず、取り乱す月斗。

「これで信じられる？」

少女は右手をグーにした後、人差し指を伸ばす。

「なっ」

月斗は驚愕の表情を浮かべる。

少女の人差し指の先には、水が球体になり浮いている。

「信じて貰えたかしら？そろそろお互い自己紹介しましょう。私はアリス・Ｌ・レリスティア。レリスティア王国第三皇女よ。よろしくね」

少女改めアリスは水球を消し、右手を差し出す。

「式織 月斗」

いろいろあつて頭のキャパシティがパンク気味な月斗は、そういつて手を握るのが精一杯だった。「来てくれてありがとう。感謝するわ」

見るものを魅了する笑顔でアリスは礼を述べる。

「いや、一つ学んだよ」

ふーとため息をついた後のように見える顔で月斗は頭を掻くそぶりをみせた。

「なにをかしら？」

「世の中には理解できない現象があるってことをさ」

「そんなの当たり前じゃないの、だから世界は面白いのよ？」

アリスはクスクスと今にも笑いだしそうな笑みを浮かべる。

「世界は面白いか・・・ま、つまらないよりかはマシか」

ダッフルコートのポケットに手をつっこみ月斗も笑みを浮かべる。

アリスの視線が月斗の全身を見るように動く。

「もう体調にも問題ないみたいだから、本題に入るわね。とりあえずそこに座ってくれる？」

アリスに言われ、月斗も椅子に腰掛ける。

「助けてとは書いたけど、事態はそこまで切迫しているわけではないの。でも近い内に何かしらの動きはあると思うの」

「いや、なんだそれ。遠回し過ぎてわからないって。俺に出来る事なら、協力するが、具体的に何をすればいいんだ？」

本題に入るといいつつ、アリスの物言いに首を傾げる月斗。一国の皇女の要請に一高校生の月斗が役にたてるような事とは、月斗自身思わなかったが、詳細を聞かない事にはどうしようもない。

「ヴィラルには四つの国があるの表面上は仲が良さそうに見えるんだけど、隣国のリンドベルに、不穏な動きがあるのよ。新たな魔道兵器の開発も確認されているわ。私が貴方と呼んだのは、戦争にならないように抑止力として、それと考えるだけはないのだけれど、戦争がもし始まってしまった時は切り札としてよ。異世界からの召喚は私の国だけの秘術だから」

「なっ、そんなの俺に出来るわけないだろ」

絶句しそうになったが、なんとか月斗は、口から言葉を出した。月斗の言葉にアリスは小さく頭を振り、真剣な眼差しで月斗の目を見た。

「今のままの貴方じゃ確かに難しいかも知れない。いえ、無理といつてもいいわね。でも、貴方はまだ精霊との契約をしてないし、どうなるかは誰にもわからないわ。伝承によると異世界から来た者は偉大な功績を遺した者だけじゃないみたいだしね。この世界の者より精霊に好かれる体質みたいで、並の術者以上の力を得るけれど、振り幅は広いみたいなの」

アリスは苦笑を浮かべながら説明をした。異世界から来た月斗にとって精霊なんてものは、ゲームか小説の中でしか馴染みのない存在で、貰える力の大小自体、想像するのが難しい。

ファンタジー世界2（前書き）

PCから打つのに変えたため、漢数字と数字が混合になったりしちゃってます。すみません。

ファンタジー世界2

「さて、でわ、簡単な説明も終わったことだし行きましようか」

素晴らしいアリスはテーブルの上にあるガラスの様な素材でできた小さいながらも高級品だと見るからにわかる細工のされた小さなハンドベルを鳴らす。チリーンと涼しげな音が部屋に響く。

コンッコンッ

ハンドベルが鳴らされ一分もしない間にノックの音がする。

「入りなさい」

「失礼いたします」

アリスが入室を促すと、落ち着いた雰囲気メイド服を着た黒い髪の毛のショートカットの女性が入ってくる。アリスより少し身長は高く160センチぐらいだろう。年頃は二十代前半といったところか。アリスとは違い大人な女性といった感じた。

「客人が目覚めましたわ。コレン儀式場は使えるのかしら？」

「すでに準備済みでございます」

コレンと呼ばれたメイド服の少女はアリスの問いに背筋を伸ばし答える。

「よろしい。さ、行くわよ」

（メイドさんとかコスプレ以外で初めて見たよ。ま、それを言うなら皇女もだけど、やっぱり本物って感じるな）

二人を見てそんなどうでもいい事を考えている月斗。

「ちよつと、話聞いているの？」

「うわっ、なんだよ」

いつの間にか結構近づいていたアリスの顔に驚き、顔を背ける月斗。

「はーもう、コレン連れて来て」

アリスはそう言う椅子から立ちスタスタと歩いていく。

「かしこまりました」

了解の意を示し、コレンは月斗の左肘をひっぱり月斗をたたせ、ま

るで恋人同士のように腕を組みアリスの後に続く。コレンのモノが腕に当たる感覚。しばらく月斗は放心状態になったため、引かれるままに歩く。部屋を出、しばらく廊下を歩くとやっと思考が回復した。

「ちょっ、これは」

「良いからついてきなさい。貴方は私の話を聞かないみたいだしね」
「悪かった」

さすがに自分が悪いとわかっている為、月斗は素直に謝った。

「コレン」

アリスが名前を呼ぶとコレンはすぐに腕から離れていく。名残惜しいが正直いっぱいいっぱいになってしまっ為、月斗は、ほっとした。「ついたわ。コレン、月斗も反省したみたいだしもう下がって良いわよ」

「はい。失礼いたします。アリス様、月斗様」

「あ、どうも」

コレンは一礼し去っていった。アリスの前には一際頑丈そうに作られた扉がある。どうやらここが儀式場と呼ばれる場所のようだ。くる途中に見た扉は大体木できていた為、月斗は胸に不安を抱いた。「さっき…話した精…霊との契約だけ…どね」

アリスが鉄の扉を押しながら話すが重いのか中々開かない。コレンさんにあけてもらえばよかったんじゃないか？と思いつつ、アリス一人では開かないようなので、月斗もともに押すと扉は簡単に開いた。扉の先には長い階段が見える。

「はあ、はあ、ありがと」

息を乱しながら、アリスは礼を口にする。

「いや、気にすんな」

常套句だが、実際扉を開けたただけなのでそう返す。

「とりあえず、ふー、今から契約してもらっから」

「テンポよすぎだろ！」

思わずそうツツコンでしまった月斗を誰も攻める事はできないだろ

う。

「でもね、この世界で生きていくには必須よ？彼らの恩恵はすごいんだから、魔法を使えるかどうかは素養の部分があるけれど、契約しない事には素養があっても初級呪文され効果を示さないんだから」「それなりに重要ってのはわかったんだが、俺も当てはまるのか？というか、この世界じゃない人間にも魔法は仕えるのか？」

答えはわかってはいたがささやかな時間稼ぎとして言ってみる。何事も心構えというものは必要だ。

「当たり前じゃない。魔法が使えないんならわざわざ異世界の人間呼んでどうするのよ。魔法の適正、まあ、魔力ね。この世界にも高い人は少しは居るけど多く見積もっても全体の4割ぐらいなのに対して異世界の人間は間違いなく高い魔力をもっているの。こんなところで話し込んでも仕方ないし、そろそろいくわよ」

そっつい歩き出したアリスの前に光を放つ白い玉が浮かび、薄暗い階段を照らす。アリスに続き観念した月斗も階段を下りていった。

ファンタジー世界3

階段をアリスに続き階段を十メートル程降りると、一辺が十五メートル程の四角い部屋についた。部屋の奥には石で出来た台座があり、床には巨大な円が描かれている。

「その魔方阵の中心に立ちなさい。さっさとすましちゃいましゅう」

「なんか怖いんだけど…爆発したりしないか？」

「爆発なんかしないわよ」

月斗の問いに少し飽きたようにアリスは答える。

「いや、だってさ。いきなり異世界につれてこられて簡単な説明しかうけず、魔方阵の中に立てとか、不安に思わない人間の方が珍しいと思うんだが」

「あーもうめんどくさい男ね。いいからさっさと終わらせるわよ。後でもうちよつと説明するから」

アリスはぐずる月斗の手を引き魔方阵の中央まで連れて行く。アリスに手を握られ、今まで女性と付き合った事のない月斗それによって黙ってしまう。

「やっと観念したわね」

アリスは魔方阵の中央に月斗を残し台座の方に歩いていく。途中服の裾を踏み転びそうになっていた。

こちらを振り向くアリス。心なしか頬がうつすらと赤く染まっている。おそらく羞恥のせいだろう。

（本当に大丈夫か？）

そんなアリスを見て、手を離され冷静になった月斗の中は不安な気持ちでいっぱいになる。

（まー、一応悪い人間には見えないんだよな。性格なんてものはぱっと見わからんが、少なくとも悪意は感じられないし、第一俺を騙す利点が何も思い浮かばんしな）

そんな事を考えているとアリスは台座にたどり着き、手を当てていた。

「はじめるけど、注意点がひとつだけあるわ。精霊を怒らせないでね」

「わかった」

何を言ってもアリスは反論を認めず、さっさと契約を行いそうなので月斗は素直に頷いておく。下手に反論し、必要な情報を言ってもらえないなんて事になったら、身の破滅だ。

「偉大なる始祖の精霊よ。我は願ひ訴える。ここに居るものに精霊に連なるものの加護を与えたまえ、この世界に生きるすべてのものに祝福を」

アリスが真剣な表情で言葉を紡ぐ。アリスの言葉に呼応するように足元の魔方陣が赤、青、緑、茶と色を変え光を放つ。アリスはまだ真剣な顔をし、月斗を見ている。

「あら？おかしいわね」

「なにが？」

足元の光に十分びつくりしている月斗であつたがアリスが真剣な表情を浮かべている為、まだ何か起きるようだろうに考えていた月斗の耳に届いたのは、アリスの困惑した声だった。

「普通なら、精霊が姿を見せるはずなんだけど、下級精霊すら現れないなんて」

「ふーん」

精霊が姿を見せない事の異常差がいまいちわからない月斗には、事の重大さ差がわからない。

「精霊が現れない事の重要性なんてわからないか、着たばかりだししょうがないわね。この世界では生まれてからすぐに精霊との契約をするの。それによってこの世界での干渉力が決まるわ。干渉力の大小にかかわらず生活が便利になるから、やらない者はまずいいわね」

「説明されてもぴんと来ないな。まだこの建物から出てないし。単

純に、これが壊れているんじゃないのか？」

そう言い月斗が屈かがんで魔方阵に手を当てると、変化が起こった。茶色い光を放った後、沈黙を保っていた魔方阵から溢れんばかりの白い光があふれ出した。

「ちよつ、おい！これどうなってんだ？」

「ごめん。わかんない」

そう答えたアリスはちゃっかり台座の後ろに隠れている。小柄なアリスの姿は台座に隠れてこちらからは見えなかった。次第に光の量が増していき目をあけているのが辛くなった為、月斗は目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4703z/>

双銃の異世界人

2011年12月19日22時54分発行